

ミーティングの重要性・位置づけ

先日、別海町がサポートする中小企業者等研修過程コースを受講する機会に恵まれました。その中で一貫して「コミュニケーションは質より量」というフレーズが出てきました。私には、このフレーズを身に染みて感じた経験があり、今回の研修で、“間違いではなかった”ことを確認することができました。

<その1> オーストラリアのシドニー大学内の研究所に所属した1991年(10ヵ月間)毎日10時と3時に15分間の“Tea-time”がありました。オーストラリアは元々イギリスからの移民でできた国なので、『イギリスの文化が根付いているのだなあ』と、ただ思っていました。実のところ、12-3人の中での英会話は、まったくといっていいほど分かりませんでしたし、日本ではそんなおやつタイムはありませんから、私にとっては「集中力を削ぐ悪習」くらいの位置づけでした。行かないでいると呼びに来られて、なんだかんだ意見を求められ、言葉に窮して赤面することになるので本当に困りました(嫌でした)。

<その2> 2005年オランダに削蹄修行に行った際に、衝撃的な出来事がありました。担当の先生2人と日本からの6人は、5日間、2台のライトエースに分乗し農家に行きました。実地の牛で訓練するのですが、ここでもお茶の時間がありました。10時と3時に持参したコーヒーとパウンドケーキをもぐもぐする15分間です。ある日、牛の白帯病に当たりました。皆様ご存じかと思いますが、その牛も中等度以上の跛行を示しており、枠場で拳肢して病変を除去すると、それなりに出血していました。そ、その時です！先生が腕時計を見て、“OH Coffee-time！”と言うなり、包帯せずに、血が出ている左後肢を降ろして皆をベンチに誘いました。日本からの6人はあつけにとられたことは言うまでもありません。「これ、ホント???? いいの????」と、それぞれ顔を見合わせました。『コーヒーの前に包帯だけしましよよ』と言いましたが、“It’s OK”と言われた記憶があります。15分後、ほぼ出血が収まった牛に包帯をしました。

<その2> 2006年8/25福岡 海の中道大橋で市役所職員の飲酒運転で家族5人が乗った車が追突され子供3人が死亡した事故がありました。はっきり言ってこの日を境に日本中が「飲酒運転は止めよう」という気運になったと思います。それからというもの、“仕事終わりの飲みにケーション”は多くの職場で消失しました。

で、そうすると、コミュニケーションの**量が減ります**から、他方の**質が上昇**します。要するに、雑談が減って、仕事上の事務的打ち合わせのみ行うようになりました。日本中そうなったと思います。日本に“Tea-time”が無いことがボディブローのようにになっているのではないかと、そのころから思い始めていました。さらに2019年からのコロナ禍も拍車をかけてコミュニケーションの時間を奪いました。大企業は比較的WEBミーティングを増やしていたようですが、現場仕事の職場は中々うまくいきません。

それでも『風通しの良い職場』を作るにはコミュニケーションの量を増す試みは必要です。

そこで、私の中での基準は、“「白帯病の蹄に包帯を巻く」ほどの重要性があるのだ”です。

もちろん私達が、出血している牛を放置して帰ることは断じてございませんが・・・

でも重要なのは間違いのないようです。